
blue&blue

美咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blue&pp;blue

【Nコード】

N6130Z

【作者名】

美咲

【あらすじ】

幸せなんかいららない。恋愛なんかいららない。そして自分自身も。20歳の私は携帯を手に夜を彷徨う。作者の経験を元にしたフィクションです。

桜がヒラヒラ舞い落ちる春。

そんな誰もが笑顔になるこの季節に、私は失恋した。

終わりの気配はずっと感じていたけど、私はそれを認めたくなくて必死に立て直そうと努力した。

彼も私のその気持ちは何となく感じて結論を先延ばしにしていたのだろう。

けれど人の気持ちは簡単に変わるものではない。

付き合っているとは名ばかりの会わない日々が数ヶ月続いた上での結末だった。

その日は久しぶりに雄介が私のアパートに泊まりに来た。

少しこじれていたけど、私と会わない間に彼も私への気持ちは見直して、これからまた二人で楽しくやっていけるかもしれないと私は無理にプラス思考で考えた。

本来マイナス思考な性格だから、それでも考えないと不安でいっぱいだったのだ。

部屋を掃除して、料理を振舞って、同じ布団で横になって…。

なるべく楽しく過ごせるよう笑顔でいようという私の作戦はなかなか効果があったように思う。

最近頻繁にしている小さなケンカも起こらなかつたし、ラブラブカッパルのように部屋の空気は穏やかだ。

また仲良くやっていけるかもしれない、と私は朝日の中で隣りに眠る彼を見ながら安堵のため息をついた。

大体私の気性が荒いからいけないんだ。
些細なことでも気になって責め立ててしまったり、彼のひと言であらぬ妄想をして怒ったり。

男は癒し系の女に弱いつて雑誌にも書いてあったじゃないか。
彼が安らげるようなそんな女でいよう。
そうすれば…。

「おはよう、早いね」

彼が目を覚まし、寝起きのくぐもった声で言った。

「うん。今日どうしても大学に書類届けなきゃいけないくて。出したらずく帰るし雄介は寝てていいよ」

「いや、俺も起きなきゃ。今日は予定があるから」

何気ない彼の言葉に胸の辺りがぐらりとした。

予定って誰とどこで何をするのと咄嗟に言いそうになってグツとこらえる。

ついさつき癒し系になろうと思ったのに、そんなウザいこと言ったらダメだと寸でのところで思い留まった。

適当な朝食を済ませ準備をし、玄関まで行ったところで雄介が「忘れ物」と言っつて一旦部屋に戻るのを見ながら、その長身をぼんやり眺めた。

高い背に整った顔立ちをした彼は街を歩けば女子高生なんかにはトマークの目を向けられるくらいのイケメンだ。

対して私はキツイ顔立ちが特徴ではあるが、平凡そのものな容姿をしている。

彼から好きだと言われて付き合い始めたから強気になっていたけれど、ワガママばかり言わずに彼に好かれるよう努力するべきかなどとしおらしい事を考える。

「ごめん、おまたせ」

戻ってきた雄介に、うつんと首を横に振りながら鍵を閉めて、手を振ってそれぞれ違う道を歩き出した。

私は大学へ。彼は駅へ。

その時は気付いていなかったが、それが私たちの最後だった。そしてそれに気付いたのはほんの数時間後のことだった。

大学で書類を提出した後、特にどこかへ行く気にもならなくて、私は真っ直ぐ家へ帰った。

今朝バタバタと出掛けたから部屋が散らかったままだったし洗濯もしなければ。

そう思って適当にコンビニで昼ご飯を買い、部屋へ戻ったのはまだ太陽がてっぺんにも昇っていない時間だった。

いつも通りに鍵を小鉢に投げ入れ、ふと視界の隅に見慣れないものが映った気がして私はベッドを振り返った。

そこには朝には確かになかった便箋が妙な緊張感を纏って置かれていた。

何だか嫌な予感がする。

そんな気持ちを誤魔化すかのように少し乱暴に便箋を開いた。

そこには大した文字数はないにしろ、私をどん底まで突き落とすのには十分な内容が書かれていた。

『茉莉へ。きちんと顔を見てお別れを言いに来ただけど、今日茉莉の頑張ってる姿を見たらやっぱり言えなかった。今、きみの寝顔を見ながら書いています。手紙なんて卑怯な手段を使ってごめん。もう茉莉も気付いていると思うけど、俺達別れた方がいいと思う。何度も言っているけど、正直俺は自分の夢を追いかけるのに頭がいっぱいで恋愛をしている余裕なんてないんだ。嫌いになる前に友達に戻りたい。きみにはもつといい人が現れるよ。いつかまた笑顔で会えますように』

冷たくなった指で私は何度も読み返す。

難しいことは書いていないはずなのに、何故だか上手く理解することができない。

だんだんもどかしくなって、私は携帯をつかみ電話をかけた。

「もしもし茉莉？」

すぐにコールに応えてくれた友人に私は尋ねる。

「さつき雄介から手紙もらって別れようって書いてあるんだけど、どういうことだと思う？」

突然の質問に面食らった様子の友人だったが、聡い彼女は状況を察したのか「すぐに行く」と言い残して電話を切った。

彼女：美波は大学の友人で私のアパートから徒歩五分弱のところに住んでいるので、再び手紙を眺めている間にすぐさまチャイムが鳴った。

「大丈夫？」

ドアを開けた私の顔がよっぱどひどかったのかもしれない。

彼女は眉をしかめて私の頭を撫でた。

美波は私が彼を付き合いつつ始めた頃から今まで色々な話を聞いてくれ、たまには彼も交えて遊んだりしていたので、私がどれだけ彼を好きなのか、そしてここ最近はどうだかだけ悩んでいたかを知っている数少ない友人だった。

手紙を差し出すと彼女はさっと目を通し、そして静かに聞いた。

「茉莉はどうしたいの？」

「どうしたいって？戻りたいけど…無理なんだろうなあ」

どういう訳か私は笑って答えていた。いつも通りに人間衝撃が強い事態に直面すると、笑ってしまうものなのかもしれない。

そんなどうでもいい事が、本気で世紀の大発見のような気がした。

「だったらそう伝えた方がいいよ」

そうだろうか。

美波の真剣な目を見ながら私は考える。

言ったところで何かが変わるのだろうか。

伝えたって雄介の気持ちはもう戻らないんだろう。

だったら言うだけ自分がみじめになるような気がした。

「あの時何で伝えなかったんだろうって後から後悔したって遅いんだよ」

彼女は重ねて言う。

けれど言うだけなら簡単だ。

当たり前だけど彼女は私ではない。

これは当事者にしか分からない辛さなんだという事が身に染みた。

楽しい時や幸せだった事を独り占めしてきたんだから、別れの辛さだって独りで乗り越えなければいけない。

そう悟った瞬間、眩暈がしそうなくらいの高い壁が目の前に現れた気がした。

「ありがとう。そうだね、一回話してみるよ」

そう言つて私は会話を終わらせる。

どうしたらいいのか分からなくて美波を呼び出してみたけれど、結局これは私のことだ。私が何とかしなければいけないのだ。

その後、心配する美波を大丈夫だからと笑顔で玄関まで送り、冷蔵庫から私はウイスキーを取り出した。

以前興味本位で買ったウイスキー。

けれどそのあまりの不味さにずっとしまいこんでいたもの。

それをコップなどには注がず直接口に含む。

「まずい」

相変わらずの味に思わず声が漏れる。

けれどしばらく不味いウイスキーを喉に流し込む作業に没頭する。

終わらせたくない、そう電話してみようか。

そう思いながら一口飲む。

いや、面倒な関係が断ち切れて奴は今頃せいせいしてるかもしれない。

そう思つてまた一口。

出口のない答えを探しながら飲む酒は早い段階で酔いを連れてきた。

ただでさえ元々アルコールに強くない私だ。

ふらふらになりながら勢いにまかせて携帯を手にとる。

私のことを心配しているようが別れられて祝杯をあげているようが関係ない、本音を言うただ声が届かなくなった。

意外なことに電話は待つていたかのようにすぐに繋がりに、望み通り彼の声を聞かせてくれた。

その声を聞いた途端、今まで出なかつた涙がようやく溢れた。止まっていた時間が動き出したかのように。

けれどアルコールのせい、か現実逃避なのか、話し続ける彼の言葉が全く頭に入ってこない。

だから、ただ大好きな彼の声の響きを聞きながら私は泣いた。

どのくらい経つたのだろう、気付けば通話は切れており、それが私の携帯の充電切れのせいだと気付いて絶望し、ベッドに突っ伏してまた静かに涙を流す。

このままずっと泣いて身体中の水分がなくなって死んでしまえばいいのに、心からそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6130z/>

blue&blue

2012年1月6日17時46分発行